

巻頭言 “Global Bioethics” の成立

第四回国際生命倫理学会世界会議の成果を科学哲学として読む

日本科学哲学会会長 坂本 百大

昨、1998年11月4-7日の4日間にわたって第四回国際生命倫理学会世界会議が東京市ヶ谷の日本大学会館で“Global Bioethics”という総合テーマのもとに開催された。かつて例を見ない、スケールの大きな国際学会として今その成果に対する評価が世界的に浸透し注目を集めている。この世界会議全体の議長としてその企画、運営の責任を果たすことができた私自身この大会から多くの示唆をえた。以下、その概要と評価について報告したい。

まず、そこで討議された話題の広域性と学際性が日本においても、また世界的に見ても類を見ないものであった点が注目される。参加者の専門領域は哲学、民俗学、宗教学をはじめとし、法学(民法、刑法、医事法など)、経済学から生命諸科学(特に分子生物学、遺伝学)、環境諸科学、農学、先端医学、薬学、人口学に及び、またさらに、生命科学関係の諸国際機関(WHO、CIOMS、UNESCOなど)その他、日本の科学技術庁など、各国の政府機関からの参加もあり、行政や政策にまで話題を広げた。参加者は450名を超え、その内350名以上が外国からの参加者であった。国別に見ても40カ国を超え、西欧先進国のみならず、アジア、アフリカ、南米、東欧からの参加者が西欧諸国並みに多く、まことに国際色あふれる、字義通り地球規模のものであった。これは一面、“Global Bioethics”を総合テーマとして謳ってあったためとも思われるが、他面、生命倫理が西

欧指導型のものから一歩抜け出しつつある予兆であるとも見てよいだろう。

ここで討議された話題のうち特色のあるものを2、3挙げてみよう。

(1) Global Bioethics の可能性とその哲学的基礎。生命倫理という課題そのものがごく最近の1960-70年代の科学技術革新に対するテクノロジー・アセスメントとして発生したものであり、西欧先端科学技術に対する評価として、西欧的価値観、哲学的基盤を伴って始められたものであったが、今現在、生命倫理が地球規模化される中で果たしてこの価値観はなおも妥当なものであるか否かが問われた。とくに、西欧生命倫理学界で優勢なジョージタウン大学グループの『生命倫理の4原則』が悪しき原理主義として批判された。また、西欧的な分析的生命論が批判され、ホーリスティックな生命観が提案された。ここでアジア的メンタリティーの参加が期待された。新しいニュー・サイエンスの動きとしてみると面白い。

(2) 生命科学技術そのものの進歩にかかわる話題としてヒト・クローンの問題が関心を集めた。クローン人間はおそらく数年のうちに実現するであろう。この技術はすでに神の領域ではない。むしろここで議論が白熱したのは、クローンによって人間の部品臓器を選択的に作り出し、それを移植材料として利用しようとする先端技術の推進論であった。人間機械論はここまで現実のものとなった。

(3) 臓器移植関連で、脳死による死の再定義の問

題が各国の法律行政の責任者も交えて生々しく議論された。昨年の日本の脳死立法は好タイミングであった。P. シンガー、A. カプロン、竹内一夫ら現場の指導的立場にある学者がこのシンポジウムに参加し、この課題は一段と広がりを見せ、同時に哲学的に一步深まった感がある。

(4) 環境問題は今回の最適のテーマであった。発展途上国の識者も参加して環境思想の哲学的根拠とその現実的問題とが合わせて討議された。議論は農業問題、開発問題、人口問題、優生学、人工進化論へと展開し、さらに、基本的人権の概念の普遍妥当性を疑い、さらに進んで近代ヒューマンズの本質的欠落を改めて問い直すところまで議論が深まった。

(5) ゲノム問題は相変わらず生命倫理の最重要課題であった。約30億あるといわれる人間の全ゲノムの解読作業はこのところ加速され、21世紀のかなり早い段階で完了するらしい。問題はこの最先端の生命科学技術と社会の接点に対するアセスメントの方法である。アメリカではこの科学技術を即座に特許化し、ベンチャー企業に活用し、商業化しようとする動きが公認されつつある。ゲノム研究の成果をいかに用いるべきかはまさに生命倫理が関与すべき重大課題であろう。

(6) 遺伝学の進歩に伴う遺伝情報の利用、プライバシーと公開性の問題は情報倫理という観点から大きく取り上げられた。死亡原因の殆どに遺伝が絡むことになるだろうと予測される将来において遺伝情報の不適切な管理は重大な社会的問題を引き起こす、たとえば、生命保険業界の死活の問題になる恐れがあるとのこと。スイスの再保険会社

が特別の人材を派遣して、とくにこの問題のセッションを開いたのが印象的であった。

(7) その他、主なテーマとして、動物倫理、人工臓器、異種間移植、安楽死問題、生殖技術、遺伝子治療、健康の公平性、医療薬事行政、医療過誤、医事法など、多彩であった。

本大会を契機に“Global Bioethics”(『地球型生命倫理』または『広域生命倫理』と訳すことにしよう)という一つの学問分野と學術用語が新たに成立し、国際的に学界の承認を得たものと考えたい。この“Global Bioethics”という語は実はすでに、そもそも“Bioethics”という語そのものの創案者であるR.V.Potterによって1988年に再び、彼の著書の題名として用いられている(Michigan State University Press, 1988)。Potter教授の、時代を見る目の確かさに驚嘆せざるを得ない。しかし、Potter教授は腫瘍学者である。このような発想はむしろ、われわれ科学哲学者(できればアジア系の)の中から自生的に提案されて然るべきであった様に思われて残念である。何故ならば、これは一つの、時代を背負った、そしてアジア的メンタリティーを視野に入れた『総合科学』、あるいは『統一科学』の提案と思われるからである。Potter教授はいま、80数才。“Global Bioethics”の普及、発展、推進のための共同作業の提案を私宛に発信してきている。そのため彼自身がGlobal Bioethicsについて語った45分のビデオ・テープも送られてきている。ぜひ耳を傾けていただきたい。日本科学哲学会としても何らかの対応はできないものであろうか。



会務報告

(1998.4.1 ~ 1999.3.31)

日本科学哲学会第9期理事会

第6回

日時: 1998年9月12日(土) 13:00 ~ 14:40

議題: < 報告事項 >

1. 編集委員会報告
2. 大会実行委員会報告
3. 国際生命倫理学会第 回大会の後援について
4. The 16th Biennial Meeting of the

Philosophy of Science Association について

5. その他

< 審議事項 >

1. 名誉会員について
2. 会費滞納者の扱い(雑誌等の発送)について
3. 旅費規程について

4. 謝金規程について
5. 雑誌の販売について
6. 「クローン技術に関する基本的考え方について」に関する意見募集について
7. その他

第7回

- 日時：1998年11月21日(土)12:00～13:15
- 議題：1. 総会の進行及び提出議案について
2. 会計報告
 3. 名誉会員の確認
 4. 次期大会について
 5. その他

第8回

- 日時：1998年11月22日(日)12:00～13:20
- 議題：1. 第32回大会実行委員長について
2. 学会誌第32号編集委員長について
 3. 次回編集委員会、次回大会実行委員会について
 4. 各種内規について
 5. その他

第9回

- 日時：1999年1月9日(土)14:30～16:00
- 議題：1. 第32巻編集委員の委嘱について
2. 第32回大会実行委員の委嘱について
 3. 謝金規程について
 4. 旅費規定について
 5. その他

第10回

- 日時：1999年3月27日13:30～14:30
- 議題：1. 第18期日本学会議会員の登録について
2. マイケル・トゥーリー教授講演会について
 3. アドレス変更後新アドレスの連絡がないメンバーリスト参加者の扱いについて
 4. オーストラリア科学哲学会との交流について
 5. 企画委員会設置の可否について
 6. その他

『科学哲学』31巻編集委員会

第3回

- 日時：1998年6月20日16:30～17:30
- 議題：1. 自由応募論文レフェリー依頼について(報告)
2. 学会誌の体裁について

3. その他

第4回

- 日時：1998年9月12日(土)16:30～18:00
- 議題：1. 『科学哲学』31巻2号製作進行状況の報告
2. 『科学哲学』自由応募論文の応募状況の報告
 3. 『科学哲学』32巻1号(1999.5発行予定)の編集について
 4. その他

『科学哲学』32巻編集委員会

第1回

- 日時：1999年1月9日(土)16:00～17:30
- 議題：1. 『科学哲学』32巻1号(1999.5発行予定)製作進行状況の報告
2. 『科学哲学』32巻2号(1999.11発行予定)の「特集テーマ」について
 3. その他

第2回

- 日時：1999年3月27日(土)14:45～16:00
- 議題：1. 『科学哲学』32巻1号の製作進行状況について
2. 『科学哲学』32巻2号の執筆者の確認
 3. 『科学哲学』32巻2号書評執筆者について
 4. その他

第31回大会実行委員会

第2回

- 日時：1998年6月20日(土)15:00～16:30
- 議題：1. 第31回大会について
- (1)特別講演について
 - (2)シンポジウムについて
 - (3)ワークショップの企画について
2. その他

第3回

- 日時：1998年9月12日(土)14:50～16:20
- 議題：1. 第31回大会プログラムの決定
2. その他

第32回大会実行委員会

- 日時：1999年3月27日(土)16:15～17:30
- 議題：1. 第32回大会について
- (1)特別講演について
 - (2)シンポジウムについて
 - (3)ワークショップの企画について
2. その他

アメリカ中西部からのローカルな報告

金子洋之（専修大学）

昨年の夏よりインディアナ州北部のノートルダム大学に滞在しています。私が到着する少し前に Boolos を追悼するカンファレンスがここで開かれ、関連分野の大物哲学者が大挙してやって来たのですが、残念ながらそれを見ることはできませんでした。その後は特に行事のようなものもなく、特にお伝えすべき情報はないのですが、それならそれでそののんびりした雰囲気伝えよという要請がありましたので、ごく簡単な報告を書くことにします。

大学はシカゴから車で二時間ぐらいの小さな町サウスベンドというところにあります。小さな町と書きましたが、人口の上ではインディアナ州で三番目に大きな都市、しかし私の見るところでは単なる田舎町に過ぎません。こういう場所に逼塞していると、アメリカ全体はおるか、隣の州で何が起きているかについてすら皆目情報が入ってきません。これは哲学に関してもだいたい同様で、教員個人個人のネットワークはあるものの、それが全米に及んでいるというわけではないようです。（もっとも、私のアドバイザーである Detlefsen 教授が論理学雑誌の編集人であるために、最新の文献が発売前に送られてきます。この情報は結構おいしいものがあります。）ですから、以下の報告はアメリカの最新情報でもなければ、何か全体を俯瞰したような報告でもなく、ノートルダム周辺の限られた話でしかないことを最初におことわりしておきたいと思えます。

さて、ノートルダム大学について話をするのに一番よいのは多分フットボールの話題でしょう。会員の多くの方は、ノートルダムが論理学の雑誌を刊行していることはご存じだと思います。しかし大多数の日本およびアメリカの人々にとってノートルダムは、フットボールチーム以外の何ものも意味しません。大学の正門を入ると何よりも目を引くのは8万人収容の競技場であり、ここに来て最初にもらった文書には、客員の研究員にはノートルダムの通常のFacultyと同等の権利が与えられるとあるのですが、但し書きがあって、フットボールの入場券だけは例外とするということが明記されています。この熱狂ぶりは日本に

あってはほとんど想像不可能なのは、と思われ

ます。それを物語る一つの例として、「Big Ten 加入問題」というのがあります。Big Ten というのは、例えばアイビーリーグのように一定の地域の一定の条件を満足する大学連合とも言うべきものでしょうか。中西部のミシガン大学やシカゴ大学など（実はTenと言いながら10以上の大学が加盟している）総合大学からなる大学連合に加入しないかという打診がノートルダム大学に対してあったのです。これによって大学内部は真二つに割れて議論がなされました。これに加入することは、大学院をさらに充実し、総合研究大学としてのステータスを確保することに繋がります。しかし、学長や卒業生サイドの反応はこれに全く反対であり、学部教育重視、カトリック大学としての独自性を維持するためにはこれに加入すべきではない、という結論が出たようです。この決定に対しては教員の間にも多くの異論があったようですが、一斉に同じ方向を模索する日本の大学とはちょっと違うじゃないか、という印象をもちました。大学の個性や大学スポーツのあり方に関してちょっと考えさせられる話題であったことは確かです。ただ、実際のところ、この決定にはさらに別の問題が絡んでいます。それは18世紀以来独立リーグを転戦してきたフットボールチームが、それを放棄し中西部の大学リーグに加入するのは許されない、という卒業生および一般の強い反応があったようです。おもしろいことに、これらの事実はおそらく新聞のスポーツ欄で連日報道されていました。

そういうわけで、一般のアメリカ人やかろうじてノートルダムの名前を知っている日本人の大多数にとってはノートルダム大=フットボールという図式が成立しているようです。しかし、この哲学科は30人近い教員を抱えており、なかなかバラエティに富んでいます。その中でももっとも人気が高いのは Alvin Plantinga 教授のセミナーで、常時二十人ぐらいの大学院生でにぎわっています。毎週金曜日に開かれるコロキウムでも、様相や形而上学に関するテーマで発表する人が多い

のは、彼の影響かと思われます。他には、Michael Detlefsen, Michael Kremer, van Inwagen, Sayre, Paddy Blanchett, Fred Warfield, 物理学の James Cushing といった人たちが分析哲学・論理学・科学哲学関係の講義やセミナーをっています (Marian David は不在)。残念ながら、私の出席している Detlefsen 教授と Kremer 教授のセミナーはいずれも出席者は多くありません。前者は私を含めて3名で、他の二人は数学の院生、後者はマスターの連中が4人くらいです。おかげでこちらも質問や発言をしやすいという利点はありますが。

Detlefsen 教授の Philosophy of Mathematics のセミナーは、Lavine の 'Understanding The Infinite' をメインのテキストにして、Feferman の論文 'In the Light of Logic' の中のいくつか) や Dauben の一連の Cantor についての論文などを参照しながら読み進めていくといったスタイルをとっています。このセミナーは大変面白く、Lavine の提出する Cantor 集合論の歴史的再構成を批判的に検討しながら、そうした歴史的な再構成の影響が、Frege, Russell, Hilbert, Brouwer らについての解釈や最近の数学の哲学の色々な立場にどのように関係するかを議論しています。途中、Detlefsen 教授の独自の解釈やら、数学の哲学において取り上げるべき問題点・論点が様々に飛び出してきて、英語の能力がもう少し高めればなあ、と思うのも再三ではありません。一方、Kremer 教授の Origin of Analytic Philosophy は、週に二回、講義と議論が相半ばするといった感じのセミナーです。内容は、Frege から始めて、途中、Green や Bradley をはさんで、Moore, Russell, Wittgenstein に至るというおきまりのコースですが、Frege や Russell については独自の解釈を展開しており (まだ Wittgenstein まではいっていない) 単なる入門のコースではなく、かなりレベルの高いものになっていると思います。そしてこれだけの内容を一学期でやるわけですから、その進度には相当なものがあります。ちなみに、Frege については Beany の 'The Frege Reader' を使ったのですが、これ一冊を大体三週間で終えるというような案配です。それに原典以外の解釈論文のリーディング・アサインメントが週に三本くらい、ついでに Hylton の Russell 本

を参考に読んでおけ、という具合で、かなり労力を要求されます。学生の方も呆れ顔で、宿題の量でノートルダム大学が全米の上位にランクされるという彼らの噂もまんざら嘘ではないのかもしれませんが。

これらのセミナーや哲学のコロキウムなどに出席していて感ずるのは、話題の範囲がかなり広いということです。もちろん30人近い人員を抱えているわけですから、色々な話題があるのも当然なのですが、特に専門のスタッフがいない場合、例えば情報倫理に関しては学外から積極的に人を呼んで話を聞くという姿勢があるようです。また、これは少し特殊な話題になりますが、Frege 研究に関しては、Weiner や Ricketts といった人たちの研究プログラムが、少なくともノートルダム界限では一定の影響を持っており、そのプログラムに賛成・反対は別として、彼らの研究を前提とした論文・発表が結構多いことも注目に値すると思います。これは、言い換えれば、歴史的なパースペクティブの中に Frege や Russell, Wittgenstein 等をきちんと位置づける、そこから彼らの仕事を評価し直すということ、そういう方向自体は知っていたものの、これほど影響力があるとは思っていませんでした。そうした歴史的な再構成という手法は、分析哲学の起源についてのみならず、Detlefsen 教授の数学の哲学セミナーにも顕著であるように感じられます。はたしてこの趨勢がこの界限だけの趨勢なのか、もっとグローバルなものなのかは興味のあるところです。

最後にノートルダム大学で行われる予定の会合のうち、科学哲学関係のものが一つありましたので、それを記して報告を終えることにしたいと思います。

Fifth International Conference on the History and Foundations of General Relativity

June 8-11, 1999

University of Notre Dame, Notre Dame, Indiana

(さらに詳しい情報については、金子宛に e-mail を送って下さい。)

旧東独地域の大学に長期滞在して

忽那敬三（千葉大学）

筆者は1996年春から二年間ドイツのロストック大学哲学科に客員研究員として滞在する機会を得た。ロストック大学という名前を聞いて、何らかの具体的なイメージを持たれる人はほとんどいないであろう。大学のパンフレットによると北ヨーロッパで最も古い大学（創立1419年）であり、またケプラーの師であったティコ・ブラーエが学んだことや、ウィーン大学に転出する前のモーリツ・シュリックが十数年間教鞭を執っていたことなどが挙げられるとはいうものの、ほとんど無名に近い小さな大学である。例外はあるにせよ現在では世界の哲学動向にあまり大きな影響力を持ちえなくなっているドイツ（このことの一つの証左としては、筆者が1997年5月に参加したカールスルーエ大学での科学哲学の国際学会 Académie Internationale de Philosophie des Sciences では、開催地がドイツ国内であるにもかかわらず、会議での公用語は英語とフランス語のみであったことを挙げることでできよう）の、しかもそうした目立たない大学を筆者が滞在先に選んだ理由のひとつは、大学をも含めた地域のシステム全体が大規模に変化していく様子を間近で見たいということにあった。以前は東独に属していたロストックは、1990年のドイツ再統一の後、旧西独地域から大量の資金や人員を受け入れており、いまでも再建途上にある旧東独の典型的な都市であった。

話を哲学関係に限れば、東独の大学の哲学教授はドイツ再統一の後、そのほとんど全員が解雇されることになった。東独の体制を思想的に支える役割を公式に担っていた哲学科（1969年以降、東独の大学の哲学科はどこもマルクス・レーニン主義哲学課程へと改編されていた）の教授は、当の体制自体が崩壊した以上すべて「精算」されるのが当然であるとの論理からであった。この十把一絡げとも見える処分に対しては、ライプツィヒ大学哲学科の助手U.J.シュナイダー（西独出身）が1996年に『ドイツ哲学雑誌』で行なった批判をきっかけに様々な議論が展開されてきた（P.Pasternack（Hrsg.）, *Eine nachholende Debatte - Der innerdeutsche Philosophenstreit 1996/97*,

Leipzig 1998）にこの論争の主なものが再録されており、またこれに対しては慶応大学の樽井氏が要を得た簡潔な書評を日本ドイツ学会の学会誌『ドイツ研究』27に寄せている。東独には大学の哲学教授が約30名、さらに助手等も含めて計約150名の大学教員がいたが、それ以外にも科学アカデミーの哲学中央研究所等にはほぼ同数の研究者がいた。それに対し現在の旧東独地域の大学（哲学科があるのは13校）では約40名の教授と約60名の助手、そして多数の非常勤講師が哲学教育に携わっている。ちなみにドイツ全体では大学で教鞭を執っている哲学教授の総数は約330名である。いずれにせよ、ドイツ再統一のあと新体制のもとで再出発することになった旧東独地域の大学の哲学教授職に就くことができたのは、ほとんどが西独出身の人々であった。

彼らはおよそ三つのグループに分けることができる。第一は、すでに西独で確固たる地位も評価も得ていたが、旧東独地域の哲学改革に身を投じることにした人々（M.リーデルやH.シュネーデルバッハ）。第二は、長年にわたって西独ではよきポストに恵まれなかった人々。数からすれば、このグループの人がもっとも多い。そして第三は、第二のグループと明確に区別するのは難しいことも多いが、大学教授資格を取得してからまだあまり時間がたっていない比較的若手の人々。筆者にとって身近な例ではロストック大学に筆者を招いてくれたH.ハステットやその同僚のH.J.ヴェンデル、あるいは1996年に三年毎のドイツ一般哲学会（AGPD）総会を初めて旧東独地域で開催したときの責任者であったライプツィヒ大学のC.フービツヒなどがこの第三のグループに属すると言ってよからう。概してこのグループの人々は、招聘された大学がたまたま旧東独地域にあったにすぎないと考えており、変な気負いもなく大学での教育や行政に積極的に関わってはいる（たとえば、現在ハステットは副学長職に、ヴェンデルは学部長職にある）ものの、大学の研究環境も都市の生活環境も旧西独地域と比べるとまだまだ見劣りするために、以前の住居を引き払うことなく、週末や休暇中はそちらで過ごす人が大半

であるし、若いだけに次の転出先を考えている人も多いように思われる。すべての面で伝統あるライプツィヒ大学から、哲学関係ではそれほど知られていないシュトゥットガルト大学へと1997年に転出したフービツヒの事例は、現時点での東西間の研究環境の格差を如実に物語っているであろう。この格差はたとえば図書についても言える。東独時代の約40年間ほとんど購入されてこなかった西側の図書のうち入手可能なものは現在できるだけ買い揃えられつつあるとはいえ、絶版で入手不可能となっているものもきわめて多く、大学図書館内の蔵書数が極端に不足していることは一目瞭然である。

しかし学生の側からすると、勉学環境としてはそれほど悪くないのではなからうか。旧西独地域の有名大学では、哲学科の上級生用のゼミナールでも参加する学生の数がきわめて多く(50名を越えることも稀ではない)発言する機会があまり与えられないのと比べると、旧東独地域の大学

はおおむね教師一人あたりの学生数が比較的少ないために、勉学意欲と能力がありさえすれば早い段階から教師の懇切丁寧な指導を受けることが可能であるからである。また生活費も安く、各種の奨学金が支給される可能性も高い。それほど多くはないが、このような条件を求めて旧西独地域から入学する優秀な学生もいないわけではない。筆者が私的に毎週行っていたゼミナールに参加していたものの中にもそのような学生がおり、その学生はまだ20代前半で博士号も取ってはいないものの、この夏学期には授業を担当する機会をさえ与えられている。よい教師に恵まれさえすれば、能力を発揮するチャンスが比較的多いのが旧東独地域の大学であるように思われる。筆者としては、ドイツ哲学全般が低迷している現在(そうした現状認識から、ここでは哲学の内容についてはいっさい触れなかったのだが)、このような中から世界的に通用する哲学者が出てくることを大いに期待している次第である。

学会・研究会予告

日本科学哲学会第32回大会

【期日】 1998年11月21・22日
【場所】 法政大学

日本哲学会第58回大会

【期日】 1999年5月15・16日
【場所】 上智大学

科学基礎論学会講演会

【期日】 1999年5月29・30日
【場所】 大阪大学

日本記号学会1999年度学術大会

【期日】 1999年5月15日・16日
【場所】 札幌大学
(〒065-8520 札幌市豊平区西岡3条7丁目3番19 TEL 011-852-1181(代表))
【詳細】
<http://www.tara.tsukuba.ac.jp/semiotic/news-letter.html> をご覧ください。

第2回認知科学国際会議・日本認知科学会第16回大会合同会議

【期日】 1999年7月27～30日
【場所】 東京都新宿区早稲田大学国際会議場
(〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104)
【詳細】<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/> をご覧ください。

日本生命倫理学会第11回年次大会

【期日】 1999年11月27・28日
【場所】 千葉大学 けやき会館
【詳細】
事務局(〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部哲学研究室内 TEL. 3329-3220)にお問い合わせ下さい

6th Workshop on Logic, Language, Information and Computation

Dates: 1999.5.25-28
Location: Rio de Janeiro
Contact: Ruy de Queiroz, Departamento de

Informatic, Univ. Federal de Pernambuco,
CP 7851, 50732-970 Recife, PE Brazil
e-mail : ruy@di.ufpe.br

Conference: New Frontiers in Cognitive Science

Dates: 1999.6.4-6
Location: Binghamton University
Contact: www.paccs.binghamton.edu/newfrontiers/

7th Asian Logic Conference

Dates: 1999.6.7-10
Location: Hsi-Tou, Taiwan
Contact: <http://www.sinica.edu.tw/math/html/workshop/alc99.html>

3rd European Congress for Analytic Philosophy

Dates: 1999.6.28-7.4
Location: University of Maribor
Contact: Department of Philosophy,
Faculty of Education, Univ. of Maribor,
2000 Maribor, Slovenia
e-mail : bozidar.kante@uni-mb.si

14th Annual Conference on Computing and Philosophy

Dates: 1999.8.5-7
Location: Carnegie Mellon University
Contact: Robert Cavalier, Philosophy,
Carnegie Mellon Univ., Pittsburgh, PA
15213, U.S.A.
e-mail : rc2z@andrew.cmu.edu

22nd International Wittgenstein Symposium

Dates: 1999.8.15-21
Location: Kirchberg am Wechsel
Theme: Metaphysics in the Post-Metaphysical Age
Contact: The Austrian Wittgenstein Society, Markt 63, A-2880 Kirchberg am Wechsel, Austria
e-mail : alsw@magnet.at または <http://www.sbg.ac.at/phs/alws/alws.htm>

11th International Congress of Logic, Methodology and Philosophy of Science

Dates: 1999.8.20-26
Location: Cracow, Poland
Contact: Organizing Committee LMPS 99,
Institute of Philosophy, Jagiellonian Univ., ul. Grodzka 52, 31-044 Cracow, Poland
e-mail : lmeps99@jetta.if.uj.edu.pl

Coloque International Bolzano and Frege

Dates: 1999.10.31-11.2
Location: Geneva
Contact: Kevin Mulligan, Departement de Philosophie, Universite de Geneve, CH-1211, Geneve, Switzerland
e-mail : Kevin.Mulligan@lettres.unige.ch

International Congress: Analytic Philosophy at the Turn of the Millenium

Dates: 1999.12.1-4
Location: University of Santiago de Compostela, Spain
Contact: Dept. of Logic & Phil. of Science, Faculty of Philosophy, Univ. of Santiago de Compostela, Campus Universitario Surs/n, Santiago de Compostela 15706, Spain
e-mail: lflagfal@usc.es

8th East-West Philosophers' Conference

Dates: 2000.1.9-23
Location: University of Hawaii
Theme: Technology and Cultural Values: On the Edge of the Third Millennium
Contact: Stepaniants and Ames, University of Hawaii, 2530 Dole St., Honolulu, HI 96822-2382, U.S.A.
e-mail : farrell@hawaii.edu



会計報告

【1997 年度決算】

| | |
|-----------------|-----------|
| 収入：前年度繰越金 | 879,340 |
| 学会費納入 | 2,223,342 |
| 大会参加費 | 106,000 |
| 学会誌売上 | 87,424 |
| 預金利子 | 858 |
| 合計 | 3,296,964 |
| 支出：学会誌 30 巻製作費 | 420,450 |
| 学会誌 31 巻 1 号製作費 | 0 |
| 『30 年の歩み』製作費 | 276,000 |
| ニュースレター製作費 | 89,500 |
| 第 30 回大会運営費 | 226,061 |
| 通信費 | 391,105 |
| 印刷費 | 82,900 |
| 会合費 | 107,000 |
| 消耗品費 | 455 |
| 手数料報酬費 | 53,420 |
| 小計 | 1,676,891 |
| 次年度繰越金 | 1,620,073 |
| 合計 | 3,296,964 |

【1998 年度予算】

| | |
|---------------------|-----------|
| 収入：前年度繰越金 | 1,620,073 |
| 学会費納入 | 2,000,000 |
| 大会参加費 | 100,000 |
| 学会誌売上 | 40,000 |
| 預金利子 | 800 |
| 合計 | 3,760,873 |
| 支出：学会誌第 31 巻 1 号製作費 | 387,000 |
| 学会誌第 31 巻 2 号製作費 | 400,000 |
| ニュースレター製作費 | 150,000 |
| 第 31 回大会運営費 | 250,000 |
| 通信費 | 450,000 |
| 印刷費 | 100,000 |
| 委員会交通費 | 200,000 |
| 消耗品費 | 20,000 |
| アルバイト代・手数料 | 100,000 |
| 予備費 | 1,703,873 |
| 合計 | 3,760,873 |



寄贈図書紹介

1998 年 4 月 1 日 ~ 1999 年 3 月 31 日

- | | | |
|------------------------------------|----------------------|---------|
| 『大学教育学会誌』第 20 巻第 2 号 (1998 年 11 月) | 森田浩之著 | |
| 大学教育学会 | 『社会の形而上学』 | 日本評論社 |
| 川村信治著 | 村田全著 | |
| 『季節季節の朝が静かに開かれ | 『数学と哲学の間』 | 玉川大学出版部 |
| 12 章からなるオード』能登印刷出版部 | 岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久編著 | |
| 吉田伸夫著 | 『科学を考える』 | 北大路書房 |
| 『20 世紀の宇宙像・物質像』日本図書刊行会 | 中央大学文学部『紀要』哲学科第 42 号 | |



『科学哲学』バックナンバー在庫一覧

| タイトル | 定 価 | | |
|------------|------------------|--------------|---------------------|
| 4 (1971年) | 1,200円 | 19 (1986年) | 言語理解 1,700円 |
| 5 (1972年) | 1,000円 | 20 (1987年) | 意識・機械・自然 1,700円 |
| 6 (1973年) | 非売品 | 21 (1988年) | 私の同一性 1,700円 |
| 7 (1974年) | 記号・情報・論理 1,300円 | 22 (1989年) | 科学と反・实在論 1,800円 |
| 8 (1975年) | 行為の理論 1,300円 | 23 (1990年) | 科学哲学の未来を問う 1,800円 |
| 9 (1976年) | 様相論理学 1,300円 | 24 (1991年) | 異文化理解の基礎 1,800円 |
| 10 (1977年) | 心身問題と道徳 1,300円 | 25 (1992年) | 自然化された認識論 2,000円 |
| 11 (1978年) | 解釈とモデル 1,500円 | 26 (1993年) | 科学的説明 2,000円 |
| 12 (1979年) | 言語と非言語 1,500円 | 27 (1994年) | 量子力学と物理的实在 2,000円 |
| 13 (1980年) | 社会科学と哲学の間 1,500円 | 28 (1995年) | カオスをめぐって 1,200円 |
| 14 (1981年) | 論理とは何か 1,600円 | 29 (1996年) | 1,800円 |
| 15 (1982年) | 科学哲学の展望 1,600円 | | 特集1 デュエムの科学哲学の現代的意義 |
| 16 (1983年) | 認知科学の哲学 1,600円 | | 特集2 サイバネティクス |
| 17 (1984年) | 合理性とは何か 1,700円 | 30 (1997年) | 近代における科学と哲学 1,500円 |
| 18 (1985年) | 志向性について 1,700円 | 31-1 (1998年) | 1,500円 |
| | | 31-2 (1998年) | 生物学的説明 1,500円 |



事務局からのお知らせ

1. 前回『日本科学哲学学会会員名簿』を改訂・発行したのは1996年11月1日であり、それから3年が経過致しますので、慣例に従いまして1999年11月1日に新しい会員名簿を発行する予定です。つきましては、同封しました「会員名簿記載事項確認用紙」の記載事項を確認していただき、訂正・空欄補填(赤ペン)の上、下記の通り御返送下さいますようお願い申し上げます。

記

返送締め切り期日 : 1999年7月31日

返送先 : 日本科学哲学学会事務局

(恐れ入りますが、返送料金を御負担下さい。)

「確認用紙」を御返送いただかなかった方(毎回200名以上います)は、「確認用紙」に記載されている内容がそのまま名簿に掲載されますことを御了承下さい。

2. 1999年度分の学会費をお納め下さいますようお願い申し上げます。貴台の(今年度分を含めた)学会費未納分合計金額に相当する数字が、封筒表面のラベル右下に記載されていますので、同封の振込用紙にてお納め下さいますようお願い申し上げます。なお、「-」表示の方は完納となっております。



編集後記

毎年四月に、「読み物」中心のニュースレターを出すようになってから、もう数年になります。今回は、昨年秋、東京で開催されました国際会議の報告のほかに、お二人の会員から、二つの「海外事情」エッセイを頂きました。ある見方からは対照的であると同時に、別の見方からは何となく似ていなくもない、二つの土地についての見聞録は、なかなか興味深い読み物になっているのではないのでしょうか。

最近、学生から教わってびっくりしたことのひとつに、少なくとも英語圏の哲学に関してならば、だれがどこでどんな授業をやっているのか、どのような著書や論文をこれまでに書いているのかといったことは、ちょっとコツさえつかめば、容易にインターネット上で調べられるということ

です。ある程度は知っていたつもりでも、ここまで進んでいるのかというのが、私の感想でした。そんなわけで、ここに掲載しました、海外での学会関係の情報は、たぶん、氷山の一角にすぎないはずですが、これは、アメリカとカナダの学会が中心になっていて、年6回更新される、The Philosophical Calendar (<http://www.people.memphis.edu/philos/sjp/philcal.html>) というサイトから選んだものです。たぶん、他にも類似のページがあるだろうと思います。

いつものことながら、今回も、このニュースレターは、事務局、とりわけ、古田智久氏の努力によって、実現したものであることを、付け加えます。

(飯田 隆)

日本科学哲学会ニュースレター No. 11 1999年5月15日

編集兼発行 日本科学哲学会

事務局 〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部哲学研究室内
Tel. 03-3329-1151 (内線 4100)
Fax. 03-3329-9217 【宛名「日本科学哲学会」明記のこと】

印刷 文成印刷 〒168-0062 東京都杉並区方南 1-4-1